

チェルノブイリ通信

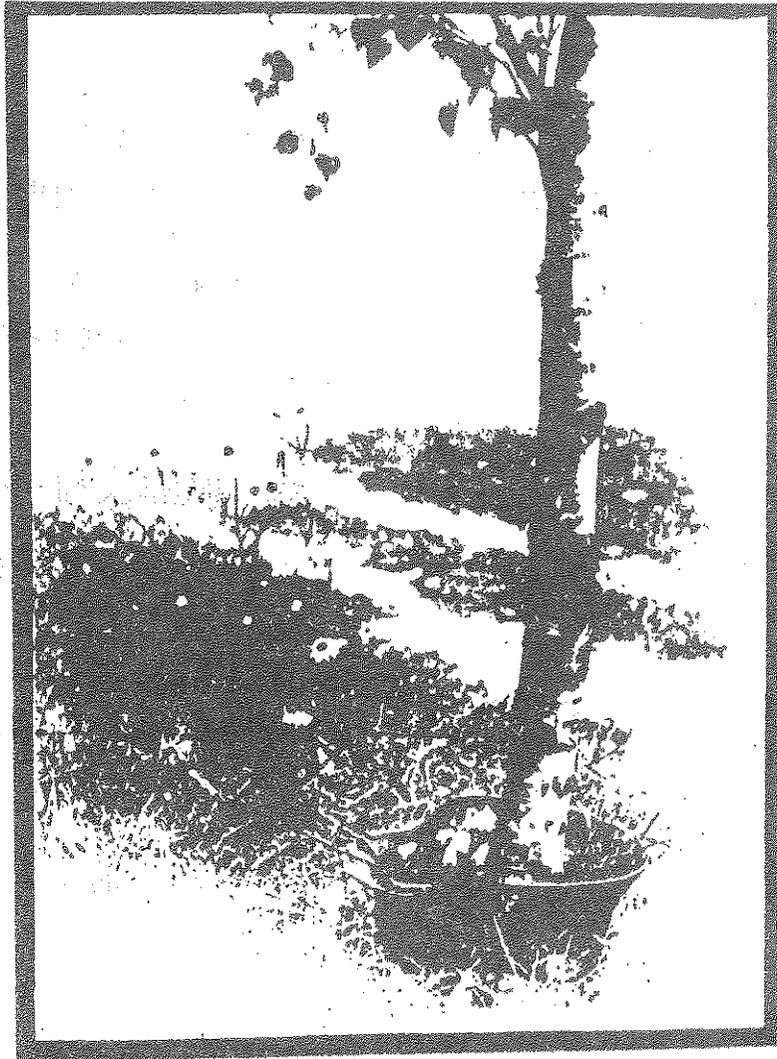
発行 チェルノブイリ支援運動・九州 事務局
連絡先 北九州市八幡東区春の町1-3-7 日開荘2号
Tel·Fax 093(681)1780

口座番号 01770-1-65328
加入者名 チェルノブイリ支援運動・九州

1996年11月30日

No.

35



生命は勝った ヘルメットに木 / 写真 フレーリ・フィソフ

チェルノブイリ通信35号を お届けします！

12月になりましたが、いかがお過ごしですか。ブイソフ親子も各地で大歓迎をうけ、多くの人達にチェルノブイリのことを知ってもらうことができました。

12月8日には、総会が行われ、次年度へ向けて新たな出発をします。ベラルーシ国内のきびしい経済状況下で私たちにできる支援を精一杯考えていきたいと思っています。皆さんの意見をぜひ聞かせてください。

今回の通信も盛り沢山です。最近執筆者の平均年齢もぐっと下がっています。この熱いメッセージをしっかりと読んでください。

【今回の内容】

- ブイソフ親子来日
- 第7回チェルノブイリ支援運動・九州総会について
- スタディツアー報告
- 事務局より

……となっています。

ブイソフ親子来日

前回の通信でお知らせしたようにベラルーシ共和国のクリチェフ市からブイソフ親子が来日しました。息子のビクトル・ブイソフ君は、「わたしたちの涙で雪だるまが溶けた」に作文を載せており、昨年に引き続き2度目の来日。お父さんのワレリー・ブイソフさんは地方新聞の記者であり、写真家でもあります。各地で熱烈な歓迎を受けました。

☆ 中津より…☆

大分県中津市 安部元子

本誌でベラルーシの子ども達の絵の無料貸し出しを知った私は、8月6日の平和授業の参考に、市立図書館での展示にと、早速とびついたのが「はずみ」の始まりとなった。

小楠小学校の平和担当、佃、恵藤、

湯屋先生方の熱意は絵の展示のみに終わることなく、長崎への修学旅行の平和報告にと繋がると共に“ニーナ先生と子ども達”（広川隆一著）のPTA有志による群読劇上演へと形を整えていった。

チェルノブイリ支援運動・九州のサナトリウムへ6年生からの寄せ書きが届けられ、更なる「はずみ」の予兆が生まれる。

ブイソフ親子との交流会を小楠小学校でも、との打診を受け、大江校長先生の快話が大きく「はずみ」をふくらませたのだった。

11月12日、事前交流会は崇禅寺（曹洞宗）で開かれ、小学校からの呼びかけで70名ものPTA参加。ピクトル君やお父さんの話をまじえながら「チェルノブイリの真実」のビデオ上映後、質問に答えてのワレーリさんの発言「私たちには何も知らされなかった。医療関係者はすべて町から去り、当時核被曝は正式な対応が全くなされなかった。」には一言も発する人がいなかった。

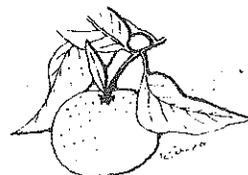
11月13日、小楠小学校での全校集会は最大級の歓迎に始まり、児童会の進行で事故の及ぼす被害と範囲の説明後、ピクトル君は「日本では核汚染の学習を小さい時からしていることに

驚いた。」と感想を伝えた。ワレーリさんから「病院での治療には薬や医療機材の不足のために限界があり、被曝した子ども達は皆さんと同じように勉強したいと願いつつ現実には死ぬのを待つ事実がある。」と重い報告。児童会は募金した見舞金を贈った。

3年生の駒廻しと折り紙会、6年生の対話集会、国立中津病院のさつき学級の子ども達との交流会を通じてのこの出会いは双方にどんな「はずみ」をもたらすのだろうか。

「原子力爆弾や原子力発電所を作った人をどう思うか」との6年生の質問に「人間ではない。悪魔のようだ。」と答えたワレーリさんの表情。この対話を目前にした私は足がすくんだ。緊密なやりとりだった。

「はずみ」とは思わぬものを生むものだ。ブイソフ親子は私達に桜の木のたねを残して次なる講演地へと向かった。あざやかな離れ枝である。桜のたねが育つ所は中津市立小楠小学校。護廠で園芸好きな用務の江口さんはこの意味を深く受け止め、お世話する決心をなさったそうである。



☆ブイソフ親子が 来た日と帰った日☆

遠賀郡水巻町 矢野 宏和

ブイソフ親子が来た日

11月9日の午後3時に、ブイソフ親子は関西国際空港に到着する予定で、出迎えの手配も整っていた。

だからその日のお昼過ぎ、(有)有機コーヒーの事務所に息子のビクトルからの電話を受けたとき、目の前が真っ暗になった。「ナリタ」という単語が胃袋を締め付けた。

日本の空港に到着しても何の出迎えもない。行き場を失ったブイソフ親子は、中村隆市さんの名刺を空港の業務員に差し出し、電話をかけてもらったのだろう。

成田空港と福岡県遠賀郡の水巻。

「じゃあ、そこで待っててね。すぐに迎えに行くから」と言える距離ではない。父親のワレーリさんは母国語以外は話せない。ビクトルは英語が少し話せるのだが、私の萎えた英語では何のアドバイスもできないまま、電話は切れてしまった。

結局、中村さんがアエロフロート・ロシア航空の原田さんという救世主を得た。原田さんは成田空港から羽田ま

での付き添いと、羽田から福岡空港までのチケットの手配、かつその料金の立て替えと、さらにブイソフ親子の朝食の心配まで、3段スライド方式神業的なサポートをして下さった。

その日の夜9時にブイソフ親子は福岡に到着した。水巻の家に着いたのは、深夜。普段は、(有)有機コーヒーの社員寮として、私と同僚の大友君が住んでいる一軒家は、前日からの大掃除により、きれいになっていた。コスモスなんかも飾ってみた。大友君はどこからかゆったりしたソファを調達してきた。

ワレーリさんとビクトルがそのソファに身を沈めてくつろいでいる。

「無事に着いて良かった」と思っているのだろう。それを見て私も安心した。

翌日、夏にチェルノブイリの地を訪れた高校生、大学生ら5人が集まり、パーティーを開いた。彼らとブイソフ親子とはその夏に会っているから、皆、3ヶ月ぶりの再会だ。

ビクトルは、性格もいいし、ハンサムで、しかもギターでもってかっこよく歌うものだから、常に女の子たちに囲まれている。NHKがチェルノブイリと日本の若者の交流を取材しにきていた。

そんなこんなで疲れたのだろう。ビ

クトルはその晩、喉の痛みを訴え薬を求めた。「風邪か？」と聞くと、小さく頷く。

私は普段から利用している薬を持ち出し、飲み方を説明した。「とっても苦いから、この薬を口の中に入れたら、すぐにこの水で流し込みたいよ」と説明したつもりだった。ところが、ピクトルは薬を口の中に入れると、口をもぐもぐさせ、顔をしかめた。

「ベラルーシではそうするものなのかな」と一瞬戸惑ったが「ほら、すぐに水で流し込まないと」とグラスを渡すと、ようやくそれで流し込んだ。目が潤んでいた。

私が風邪をひいても何もしてくれない大友君も、サラダを作ったりコーヒーを煎れたり、さりげない優しさの男になっている。ワレーリさんとピクトルと、大友君と、私と、食卓を4人で囲んでクッキーを食べながら静かに夜は更けていった。

それぞれの地、人と

次の日から、ブイソフ親子は、長崎、中津、下関を訪れた。そして、それぞれの地で、温かい歓待を受けた。

長崎でのこと。

バスから降りると、川原重信さんと、ボランティアで通訳をしてくださる明

坂尚子さんが待っていてくれた。

川原さんは、ワレーリさんの希望通り、平和公園での植樹を準備してくださっていた。そのことを明坂さんが伝えると、ワレーリさんはベラルーシから持参した桜の木の苗を取り出す。どうしても植えたいらしい。しかしベラルーシの苗を平和公園の敷地に植えるのは難しいようだった。明坂さんがそのことを伝えた。

明坂さんがいることで、ブイソフ親子の気持ちが落ち着いていくのがよく分かる。一つ一つのことを優しく丁寧に語りかける姿に、私はしばし見とれた。前日のピクトルの風邪のことが気になっていたが、安心して私は帰途につくことができた。

中津の小学生との交流。下関の観光、報告会。行く先々で、ブイソフ親子はたくさんの人に愛されて、大切にされたのだろう。

3日後、下関に迎えに行ったとき、ピクトルの顔はとてもいきいきと、輝いて見えた。

水巻の家に戻ると、ギターリストの辻幹雄さんが待っていた。

チェルノブイリ報告と

11弦ギターレクイエム

辻さんは、4月にチェルノブイリ原

発事故による放射能汚染地の4カ所でレクイエムを演奏されている。ブイソフ親子の住むクリシェフで、またブイソフ家の自宅においても演奏しておりそれ以来、辻さんとブイソフ家の交友は続いている。

ビクトルは、辻さんの奏でる調べを「生きる力がわいてくる」と表現し、辻さんは「チェルノブイリの大地の草や土、空。あらゆる生き物の魂を鎮めたい」と語り、弾く。

チェルノブイリの現状報告と、辻さんのレクイエムと。その組み合わせは、必然的なものだった。

チェルノブイリ現状報告の場で。記者であるワレーリさんには、常に「伝えたい」という気持ちがにじみでいた。報告内容の打ち合わせや、新聞社からの取材に答えるとき、つい話が止まらず、通訳を困らせてしまう。「もう少し、ゆっくりと」と指摘すると、本当に申し訳なさそうに頭を下げ、手を合わせるワレーリさんだった。記事と写真を表現手段とするワレーリさんにとって、人前で話すことは苦手だったのかもしれない。

与えられた時間はおよそ1時間弱。そのなかでワレーリさんは、お金がないため治療を受けることのできないサーシャのこと。その母親の悲しみと絶

望。子どもが一番病んでいるという現実を伝えた。

会場の空気が凍てついた感じになる。目頭をハンカチで押さえている女性を何人か見かけた。そこに辻さんのギターが続く。厳選された音、響きが積み重なっていく。

私は想像してみた。放射能に汚染されたベラルーシの小さな村の小さな講堂で。辻さんがこのレクイエムを奏でたとき。自然も心も身体も放射能の中で傷つき、生活する人々は、どんな想いでこの響きの中にいたのだろう。

水巻と玄海と田川の3カ所で、ブイソフ親子の講演と、辻さんのコンサートは3日間にわたって行われた。そして、13万円のカンパが会場から寄せられた。

深夜の公開録音

ブイソフ親子が帰国する前の晩、お別れパーティーを終えて、水巻の家についたのは午後11時半頃だった。

急ぎよ、辻さんの提案で、ギターの演奏をテープに収録してブイソフ親子にプレゼントすることになった。

奏でる曲は、辻さんがチェルノブイリでのコンサートの移動中に、パッと閃いて車の中で作成したものだ。

深夜の公開録音。ブイソフ親子と、

中村さんと大友君と私は、贅沢で幸せな時を過ごした。六畳の居間に、辻さんのギターが響く。音色から、ベラルーシの森や草原や夕日が想起される。「今度、ベラルーシを訪れたとき、子どもたちがこの曲を演奏していたりしたら、自分は泣いてしまうね」と辻さんが言う。きっと、これからベラルーシの子ども達がこの曲を弾きつぐことだろう。

かたわらでは、中村さんとピクトルが肩を組んで音の流れに身を委ねている。フレイリさんは「日本で過ごした日々は生涯で最高の時間だった」と言い残した。

ブイソフ親子が帰った日

来日したときと同様に、帰国する際にも、ドタバタ劇は繰り広げられた。

交通渋滞に巻き込まれ、福岡空港から成田へ飛び立つ全日空の飛行機を、私たちは車の中から見上げていた。

けれど、乗り遅れたおかげで、福岡空港に見送りに来てくれた人達と、ゆっくり過ごせたのは幸運だったように思う。

皆、もう少し日本にいてほしいという気持ちだっただろう。飛行機に間に合わず、ひよっとしたらまだ日本にいられるんじゃないかと、見送りに来た

学生は思っていたという。出発までの間、別れを惜しんだ。

ブイソフ親子と私は、羽田行きの飛行機に乗り、バスで成田へ向かった。空港で、寄せられたカンパをドルに換える。

サーシャの治療費。今回フレイリさんはサーシャという10歳の少年とその母親の手紙を持参しており、講演で発表した。お金がないため治療を受けることができないサーシャに2100ドルを贈ることができた。

靴下。スリッパ代。ピクトルが通う学校には、給食費を支払えなかったり、冬にも靴下をはけない生徒が居る。その子どもたちのための234ドル

それぞれのお金の意味を記した封筒にドル紙幣を入れながら、ピクトルに説明した。お金の意味は重く、お互いに紙幣の枚数を数えなおした。

最後に「いいね。このお金は昨日のお別れパーティーに集まったみんなが寄せてくれたお金で、ピクトルがCDデッキを買うためのものだよ。これで辻さんの音楽がいつでも聞けるね」と言い渡すと、ピクトルは喜ぶうつむいた。

2000円の空港使用料の券を二人に渡すと、それから先に私は一緒にいけなかった。

ゲートへと向かうビクトルが私の方を向き「あれっ」と言う表情を浮かべる。ワレーリさんがそれに気づいて握手を求めてきた。そして抱き合った。ビクトルがそれに続く。目鼻のあたりが赤くなっている。

最後に伝える言葉を「これからも一緒にがんばっていこうな」と、英語で考えていたのだが、一言でも話すと涙がこぼれる状態だったので、何も言わなかった。肩を少し強めに叩くと、ビクトルは私の肘の部分をついた。立ち止まり、振り返り、ワレーリさんが手

を合わせて、頭を下げる。ビクトルが手を振る。そんなことを2度3度と繰り返しているうちに二人の姿は見えなくなった。

帰る先は放射能汚染地域のなかにある。ベラルーシ共和国のクリチェフの、家族と森と菜園と、そして風吹く大地と……。

しばらくして、パイソフ親子を乗せた飛行機は飛び立ち、秋の薄青い空へと消えていった。

◆事務員募集◆

チェルノブイリ支援運動・九州では事務員を募集します。

人数：1名

時給：600円（交通費1日最高500円まで支給）

勤務時間：月曜～金曜、午前10～午後2時 週に4、5日 15時間程度

仕事内容：募金の整理、資料の整理、電話の応答 その他

条件：・年齢、性別は問いませんがワープロのできる人。パソコンや印刷機類にアレルギーが無い人。（募金整理はパソコンで行っています）

・月一回の事務局会議（夜のことが多い）に出ることのできる人で、長期間務められる方。

*委細面談の上決定させていただきます。3月頃までは週2、3日来ていただき支援運動の活動を知っていただいたり、仕事になれていただきます。（時給が出ます）。*問い合わせは、支援運動事務局まで。



第7回 チェルノブイリ支援運動・九州 総会について

12月8日(日)に総会があります。
(くわしくは同封チラシをご覧ください)
この総会議案をよくお読みの上、総会
にご出席ください。

第7回総会議案

一、96年度活動報告(略、総会
報告として次号にて報告します)

二、サナトリウム・九州につい
ての総括と今後に向けた提案

①これまでの歩み

a、同盟からの要請とサナトリウム・
九州のオープン

1991年6月、支援運動・九州の
初めての調査団がウクライナとベラル
ーシを訪問しました。ベラルーシで私
たちを受け入れてくれた団体が「社会
エコロジー同盟・チェルノブイリ」で
した。何の面識もなく、直接手紙のや
り取りをしたこともない私たち一行を、
ミンスク空港まで出迎えてくれ、ベラ
ルーシでの行動が全て希望通りにいく
ように手配してくれました。その時、
子どもたちのためのサナトリウム建設

について同盟の計画を聞きました。外
国に子どもたちが保養に行くことに
ついて、彼らは否定的な見解を持って
いて、「ベラルーシの汚染されていない
ところにサナトリウムを作って、そこ
で子どもたちを保養させることが望ま
しい。外国で保養することは子どもた
ちにとって必ずしも良い結果を生まな
い。子どもたちは外国と自分たちの国
とを比較して、外国にあこがれだけを
抱くようになっている。これは決して
良いことではない」と。

それから1年後、同盟からサナトリ
ウムを作るための支援を求めるFAX
が届き、同盟の代表団(4人)を日本
に招待しました。九州各地で報告会、
交流会を持ちながら、取りあえず「3
年の間は九州が責任をもってサナトリ
ウムを支援していく(3年後に見直し
を行なう)」ことを確認しました。

そして1992年12月1日、ミン
スク郊外にあるオリンピック選手専用
のスポーツリハビリ施設「スタイキ」
のゲストハウス1棟を借り切り、「サ
ナトリウム・九州」(スピイスロッツ
河畔の九州)がオープンしました。

b、サナトリウム・九州の利用状況

約200人まで収容可能で、汚染地に住む子どもたちが、教師に引率されて3週間サイクルで保養にやってきます。一人が3週間療養するためにかかる経費は約100ドルです。サナトリウム・九州の運営は九州が費用の半分を負担し、残りの半分をベラルーシ側が負担するということがスタートしました。年間の支援金は5万ドルから7万ドルの範囲で行なっています。その他に、医療機器や医薬品の支援等も行なってきました。

利用状況は、92年12月～93年、973人、94年、1022人、95年、333人、96年（10月まで）、436人で計2764人です。

利用状況を見ると最初の2年間は順調に運営されていますが、3年目から利用者が急減していることが分かります。これはベラルーシ側でサナトリウムを支援してきた労組などからの支援が途絶えたためです。子どもたちを送り出す地区の労組や企業などがサナトリウムの運営費の一部を負担していましたが、経済的理由で支援がストップしたため、運営がかなり厳しくなりました。

c、運営していくことの困難性

当初より運営し続けることの困難性

は指摘されていました。ベラルーシの不安定な経済状況、施設が借り物であること、いつまで支援できるのかという私たちの側の問題などです。

一人当りの経費で見ると、1年目は1人につき87ドル、2年目は93ドル、3年目は194ドルと急騰しています。今年も同じぐらいです。労組からの支援がなくなったのに、経費は倍に膨れ上がったわけですから入所者数が激減した理由も分かります。膨れ上がった経費の内訳は、食費、宿舎借上料などの値上がり、そして人件費です。食費の値上がりとは、物価の上昇ということですが、ベラルーシの人々はいったいどうやって生活しているのだろうと疑問を持つほどの物価の高騰です。

宿舎借上料や体育施設利用料も年々値上がりしています。サナトリウム・九州は10月末で一時閉鎖となりました。スタイキの方針として、サナトリウム・九州は改修してホテルとしてオープンさせることになったそうです。私たちにはスピイスロッチ河の向こうにある4号棟が提供されることになりましたが、その借上料として年間8万ドルが提示されました。

様々な条件が重なり、はからずしも4年目にしてサナトリウムを見直すこ

とになりました。今後もサナトリウムを運営していくのか。運営していくとすれば、スタイキの施設を年間8万ドル払って借りるのか、それとも自前のサナトリウムを購入するのかという問題が今問われています。

2、新たなサナトリウム計画

a、これからのサナトリウムの位置づけ

サナトリウム・九州ではこれまで検診と保養を中心に行なってきました。検診では主にエコーによる検査を行ないます。サナトリウムに入所した子どもたちは、入所した翌日、エコーによる検査を行ない、何か異常が発見されれば、放射線医学センター付属病院で精密検査を受けることとなります。また、免疫機能の検査も行ない、入所したときと退所するときの免疫機能を比較しています。わずか一ヶ月の保養だが、どの子どもも一度から二度、免疫機能が上昇するといえます。

また、マッサージやサウナ、温水プールなどを利用し、子どもたちの健康回復を図ってきました。保養の効果については、「ベラルーシ国内の他の療養、およびサナトリウム施設と、サナトリウム・九州の子どもたちの健康回

復の状況の比較分析では、サナトリウム・九州が、健康回復の面で、このデータが予備的なものとはいえ、より肯定的な効果を得ていることを指摘することができる」（ベラルーシ保健省、ルイシ）という評価も得ています。

これからもこうした検診と保養を目的としたサナトリウムにするのか、あるいは療養を主目的としたサナトリウムにするのか、検討が必要です。

甲状腺ガンなどの手術を受けた子どもたちが、術後、政府から何の保障も受けられず、放置されているという現実があります。エコロジー同盟の最初の代表団のメンバーとして九州にやってきた国会議員のボルコフさんは、こうした子どもや親たちの追跡調査を行なっています。手術を受けた子どもたちは、その後何のフォローもなく、また薬を手にいれようにも、お金がないため、薬を買うことも出来ずに見捨てられているといえます。こうした子どもたちを支えていくサナトリウムにしていくというのも、一つの案です。術後のフォローも含めた療養施設としてのサナトリウム、そんな施設にしてはどうでしょうか。

b、サナトリウム「日本むら」(仮称)の建設

スタイキの施設を年間8万ドルで借りるのか、それとも自前のサナトリウムを購入するのか、ということになりますが、自前のサナトリウムを選びたいと思います。

自前のサナトリウムという場合、新たに建設するのか、あるいは既存の施設を購入するのかという選択肢がありますが、どちらも可能性はあります。

チェルノブイリの子どもたちのために新たに建設されたサナトリウムとしては、ドイツの民間団体（民間グループ、ヘッセン州、全独労働者連合などで構成）とベラルーシ政府（チェルノブイリ非常事態省、チェルノブイリ基金）が半分ずつ資金を出して建設している（現在も建設中）学校サナトリウム「希望21」があります。2カ月サイクルで保養を行いますが、学校サナトリウムですから、基本的には病気の子どもは対象とはなっていないようです。

年間予算は400万ドル。職員の数 は80人。療養費は1人当り400ドル。この費用の半分をドイツが負担しているといいます。日本ではチェルノブイリ子ども基金が資金的援助を行なっています。

私たちは、こうした大規模なサナトリウムではなく、手作りのサナトリウ

ムをイメージしています。基本的には子どもたちが療養できればいいわけですから、そういうスペースを確保する。汚染されていない食物を確保する。そして術後の子どもたちの療養を目的とするならば、そのための専門家、医薬品などを整えることで目的は達成されます。それに付随するものは少しずつ拡充していけば事足るわけです。

ベラルーシ側からは様々な物件の照会がきています。労働組合や企業が保有していたサナトリウムを売却したいというものです。価格は6万ドルから30万ドル。

その一つを紹介しましょう。休息の家「アレーシャ」。労働組合が所有しています。ミンスクから南に60キロのところであり、面積は6・2畝。松林の中にあります。近くには2階建ての3つのレンガ造りのホテルがあり、一部屋に2・3人、4人が生活できます。収容人数は約150人前後。ホテルのほかに管理棟、250人収容できる食堂、350人収容できるホール、そしてボイラー室などを備えているそうです。労働組合はこの施設を土地付きで売却したいといっています。価格は30万ドルでしたが、交渉の結果19万ドルまで下がったそうです。

私たちがこれまでサナトリウム・九

州の運営のために出してきた資金よりも少ない金額で、自前のサナトリウムを手に入れることが出来るわけです。

もちろんサナトリウムが法的に支援運動・九州の所有物になるというものではありません。外国の団体・法人が所有することも可能ですが、ベラルーシ側との共同保有ということで話を進めたいと思います。エコロジー同盟、もしくは同盟を中心としたベラルーシ側の法人に私たちが加わるという形がいいのではないのでしょうか。いずれにしてもベラルーシの法律、政治状況を見定めながら慎重に話を進める必要があります。

三、放射能汚染地域における「移動検診車」導入による早期診断・治療システムの確立に向けて

チェルノブイリ支援・広島医療協議会のメンバーとして早くから医療援助を続けてきている武市先生や医療通訳の山田さんから提案です。

チェルノブイリ事故から10年たった今、従来通りの日本の支援は、より困難になっています。特にベラルーシにおいては、ミンスク医科大学、甲状腺悪性腫瘍研究所、遺伝学研究所、放射線医学センター等、主要医療施設に

は、共同研究を含めた援助が欧米諸国からなされており、ここ2年間の施設の充実ぶりには、驚くものがあります。そうした施設と関係を保ちながら、地域医療施設を通じ、未だ十分な医療援助のうけられない地域住民に接し、我々の限られた支援を、如何に有効に彼らに還元していくかを考えなければなりません。

a、移動検診車は早期診断・治療システム確立のための要になるものです。

検診車は、基幹医療施設—末端医療施設—地域住民、及び、我々日本側専門家を結びつけるため、大変重要です。また、検診車は、贈ることが目的ではなく、この検診車を使って如何に彼らとの協力体制、つまり、早期診断・治療システムを築くかにあります。そして、この共通のシステム、支援物資を通じて日本の各グループが共同で利用できるようなれば、今まで各個各自で展開されてきた支援活動にも多少の横のつながりが出来るのではないかと現在の支援状況を現地を目にする度に、過大な期待を持つものです。いずれにしても、この検診システムを点から線、線から面へと展開してゆく上で、かの広大な汚染された大地を訪れる度、検診車の必要性を感じるものです。

具体的には、ハイエースクラスのワゴン車（中古）を購入し、機材を積み込み、援助の行き届いていない地域での住民検診、学校検診等を行ないます。検診車で行なうことは、ホルモン検査、吸引穿刺、標本染色等です。これらの検診を、基幹病院の専門医、日本の外科医、臨床検査技師、看護婦が協力して行なう。従って、現地スタッフ、地域住民との相互協力関係が必要となります。協力・信頼関係を築いてくためにも、検査結果は必ず本人に知らせ、現地に残してくる。日本でやる検査は、後日、FAX等で知らせることが重要です。

b、ベラルーシにおける早期診断・治療システムの展開について

1、朝日新聞厚生文化事業団、日本赤十字社、HICARE等で来日した専門医を中心に現地パートナーとして協力してもらう。例えば、ベラルーシ放射線医学研究所、疫学・臨床部門（PRO、ラリーサ・ダニーロブナ、他）ここを通じて、ミンスク市内、及びゴメリ市ほか、地域医療施設（基幹医療施設と密接な関係を有する施設）、地域住民（学校検診）を紹介してもらう。

2、上記より、日本側の有する情報と

の検討。

3、保健省、地域保健局、各医療施設への訪問・挨拶。

4、主要医療施設との同意書・協定書・契約書。

5、3・4への訪問時、具体的支援（医薬品・医療機器）も、考慮しておく。

以上より、内外の情勢を考慮すると、事前協議のためにも早急に、予備調査・視察が望まれる。

これからますます深刻化するであろう甲状腺ガンや白血病等の病気を早期に発見し治療するためにも、早期診断・治療システムの確立は緊急の課題であり、支援運動・九州としてもこれらの提案が具体化できるように積極的に支援していきたいと思えます。

c、公的資金の申請

これらのプランを実現させていくために公的資金（郵政省のボランティア貯金利子助成金、外務省のNGO補助金など）の申請を行ないます。これらの助成金を受けるためには、専門家による医療行為が前提になっているわけですが、移動検診車をベースとしたこのプランは、公的資金を得るための前提条件を満たしており、ぜひとも助成

金を貰いたいと思います。申請時期は郵政省が3月、外務省が6月となっており、遅くとも2月までには現地調査を行ない、プランを具体化する必要があります。

d、二、三のプランを具体化するために、第7次調査団を2月に派遣します。

サナトリウム「日本むら」（仮称）構想と移動検診車の導入・診断・治療システムの具体化に向けた調査活動を行ないます。また、サナトリウムと移動検診車をベースとした診断・治療システムとの有機的結合の可能性も調査する。

チェルノブイリスタディツアー報告

チェルノブイリ・レポート その1
東京都 門間 直輝
(ゴスペルファミリー)

8月18日

両親が空港まで送ってくれました。今日初めて出会う人々とアエロフロートのカウンターで待ち合わせます。PM10:00に待ち合わせる予定にほとんどの人が遅れてきました。なかには、隣同士でずっーと待っていたのにお互い顔がわからないために言葉も交わさない、なんていうこともしばしば。とにかく顔合わせをして全員集合。総勢21名。荷物をカウンターに預け、そしていよいよ飛行機に乗り込みます。両親も初めて大友さんと話をしました。両親に見送られ出発。モスクワと東京

では約5時間の時差が生じるため、これからはモスクワ時間で考えます。

モスクワ時間 9:24

放射能測定器を大友さんから借りる。飛行機の中で計ってみると、なんと80~100を指す。成田では20だった。今は最高で160を指す。この測定器はバックグラウンドをもとにその放射能の大きさを測定する。

なぜ？空の上にこんなに放射能が？

11:20~現在では200~260を指す。最高では320。

飛行機の中で同世代の仲間と出会う。一人一人の思いは決して同じではないということが分かったけれど、この旅に参加し現地に向かう仲間だというこ

とは一致しています。何にしても貴重な出会いだと思いました。そして、それぞれ多くの人に支えられてここに来ているということが感じられました。

◎モスクワ着

夜7:08に到着。空港で入国審査の大渋滞。さっそくロシアの洗礼を受けています。

空港で九州から持ってきた医薬品が没収されそうになり、ジーマという大友さんの友人が助けてくれました。薄暗い空港を出るとこれから約一週間お世話になるリムジンバスが待っていました。そこから一時間ばかり走りホテルに到着。待っていましたとばかりにリクビダートルの除染作業を指揮した人たちのお話が始まりました。彼らは僕たちが到着するのを2時間ほど待っていたのでした。

◎除染作業者のお話

旧ソ連では事故の被害を受けた人がロシア・ベラルーシ・ウクライナの3カ国に数百万人住んでいる。いまでは、西ヨーロッパ・インド・全世界に被害を及ぼしている。

○リュドミラ 原子力省の職人 事故の時は様々な処理の指揮をとった。

○ジュコフ・ニコライ シゴロの除染

作業チームを指揮してビデオをつくった。

○アキノフ・イーグル 3号炉の屋根の除染作業を行った。

除染作業者の未来はありません。ミンスクに住んでいる除染作業者のほとんどは2000年までに身体障害者となるでしょう。1986年に除染作業をした者の46パーセントは2000年までに死亡するでしょう。

定期健康診断を受けた人々の中では、未来がないので自殺してしまう人もいる。私たちは除染作業者たちの組織を作ることにしました。チェルノブイリ事故に参加したすべての人々をサポートすることを目的とするものです。現在このアカデミーを動かしている人々の中には、

身体障害者 410人

死亡したひと 198人

子ども 753人

私たちはできる限りの援助を続けていきます。私たちは除染作業者の子どもたちもサポートする。

モスクワ市内

クラスコポリハピリセンター

ここでサナトリウムをつくっている。ロシアだけでなく汚染地帯の子どもた

ち、たくさん子どもたちが訪れては、スポーツ大会をしたり遊んだりしています。ここで心身ともに健康になります。オリンピックに出場した経験のある有名な選手らが教えるので、レベルが非常に高いです。【ゴロホワ・フェンシング 三回入賞】このような大会に参加してください。体にも精神的にも良い影響を与えます。そして、そして、身体的な能力を高めることができます。その他、除染作業者のためのリハビリセンターなどをつくっています。

皆さんがしていることはとても重要なことです。将来、皆さんにその気があれば協力体制を整えていきたいです。

この写真集にはいまここで話している全員の写真が出ています。

リュドミラさんのお話

原子力省を担当した。医術的な問題点について……

『わたしはいまでもロシアの原子力省の事務員をしています。だから、わたしと共に現在仕事をしている人は皆、除染作業に参加しています。わたしはセミパラチンスクに入りました。残念ながら身体障害者は増加しています。除染作業者の市内の療養所があります。あまり良くない。今、一番心配しているのは、私たちの健康だけでなく将

来の子どもたちの健康です。』

◎被曝量

□リュドミラさん 32レム 女性として大きな数

□イーグルさん 64レム

□ニコライさん 75レム

チェルノブイリの除染作業チームをずっと担当していた。シゴローの建物の状況、そして汚染の状況など……

実際の被曝量は4倍だと思います。カウンターはあてにならない。私たちの組織に参加している人間は皆、自分の目でチェルノブイリの事故を見つめてきました。

色々な表などを用意してきたが見せられなくて残念です。除染作業者の問題は大きくなっています。失業、精神的な障害、そして自殺。皆死亡率を高めます。

除染作業に関わった人は約65万人。専門家もいましたが中には19歳のなにも分からない兵士もいました。兵士たちは残念ながらにも分らずに機械的に作業をしました。35歳くらいまでの人たちは死亡率が高くなりました。そして、彼らは測定器を持たされませんでした。ロシアには37万人の除染作業者がいます。1987年の作

業者—この中の20万人は確実に身体障害者に、そして1万3000人が死亡します。つまり、20万人の家族が不幸に陥れられます。2000年には除染作業者の50パーセントは亡くなります。

■健康状態

◎リュドミラ 1986年に健康の問題は始まりました。目の疾患。仕事は続けていますが身体障害者として登録しています。

◎クリコフ 身体障害者として登録。

◎ニコライ 心臓の高血圧

質問で『皆さんの健康状態は?』と出たので答えてくれましたが、その後には言いました。『私たちがここにきてあなた達と出会ったのは自分たちの健康状態を話すためではなく、これからの協力関係を築いていくためにこの場にいるのです。』

お話を聞いた後、写真集を購入してサインをしてもらいました。

◎チェチェルスク 2日目

バスで長い間揺られて、チェチェルスクに向かう。想像を絶するこのロシアの大地のダイナミックさに言葉を失いました。バスに揺られながら、通訳の山口さん、大友さんに話を聞きなが

ら、でっかい空とでっかい大地にすっかり目を奪われていました。初めて、ミレーの『晩鐘』のバックの風景にある山のようなものが何であるのかを認識してはっとしたのです。本当にそのまま絵になりそうな風景を横目に、まっすぐにどこまでも続く道程を進みました。

またもや2時間の遅れでメルクールピッチに到着。到着するといきなりの大歓迎にあいました。きれいな赤と白の民族衣装に身を包んだ人々が、僕たちを伝統的な儀式で迎えてくれました。

バスの中で、大友さんよりお話があったとおりになりました。普段はこのような儀式を受けるのは団長さんなのだけれど、今回の旅は十代の若者が中心だから、若い人が先頭に立ってパンを受け取ってほしいとのことでした。

初めての歓迎

まもなく僕たちは、盛大な歓迎を受けて村の公民館のような所に案内されて、これまた甘い蜂蜜のパンを食べさせてもらいました。そして、べたべたになった手を弄んでいるときに優しいおじさんが水を汲んできてくれて、手を洗わせてくれました。このとき僕は下手な気を利かせてウェットテッシュを持ってきてしまったけれど、水を取

りに行ったことを知り、みんなに使うことをすすめませんでした。こうゆうところが僕の余計な点です。

その後、村長さんに案内されて村の学校を案内してもらいました。こららの学校は、日本のように小・中・高と分かれずに、一貫して12年生です。歴史の教室、文学の教室、算数の教室、様々な教室を案内してもらいました。あがっていたので、親近感を覚えて感動しました！

舞台には、伝統的な民族衣装を着たおばあちゃんから子どもまで、村の芸術家が総勢で踊り、歌ってくれました。それは僕に、東チモールの踊りを思い出させました。

すばらしい歓迎コンサートが終了した後、僕はお礼の挨拶をすることになりました。ほとんど用意がなかったので、大友さんに『いけ！』と合図されると少し、たじろいでしまいましたがバスの中での話もあったので、自分の今の気持ちを素直に話しました。

『みなさん盛大な歓迎を本当にありがとうございます。私たちは、日本でチェルノブイリのことを知って、本当にみなさんのことを心配して気にかけてきました。そして、ぜひ皆さんにお会いしたいと願っていましたが、今ここで会えてほんとうにうれしいです。

【学校の前でカウントしたところ40～60を指した。大友さんの話ではここは3～4キュリーの汚染がされているといます】

村の体育館で盛大な民族音楽会が催されました。今まで横にいてにこにこしていた子どもたちがみんな、舞台に

特に子どもたちに逢いたいと思いました。今度くるときには、僕も一緒に踊りたいです。』

頭の中が、真っ白だったけれどみんな理解してくれたようでした。拍手と共に意味はよく分からないけれど何か叫んでいたようでした。多分、『もちろんだ！』というような意味だったと思います。

一通り、歓迎のセレブレーションが終了して晚餐会となりました。ここではじめて、十代の私達は宿命のウオッカと出会いました。村の芸術長なる人が、アコーディオン片手に奥さんと現れて、ボルカを奏でてくれました。

その後メルクールビッチの迎賓館で夜を過ごしました。

(つづく)



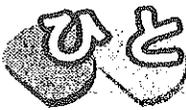
事務局より

同封の振替用紙について

*事務作業の都合により今回も全員の方に振込用紙を同封しておりますのでご了承ください。お手数をおかけしてすみませんが、すでに入金された方は廃棄するなり他の方に回すなりしてください。なお、入金の有無や金額についてわからない

ことがありましたら、事務局までお気軽に問い合わせください。
 *来年1月から郵便振込での入金、振込用紙の表面のコピーのみがこちらに届くことになりました。裏面に書込ができなくなるので、裏面に印刷したものを、今後使用されないようお願いします。もし、使用されますと、こちらに届くのが遅れますので、よろしくご協力ください。

「核は、その利用目的が戦争であれ、平和であれ、本質的な差はありません」。被爆地・長崎を訪れてそう実感した。「原爆は一瞬のうちに命を奪った。チェルノブイリは、徐々に命を奪っている。人の命を奪う点では同じものです」
 一九八六年のチェルノブイリ原子力発電所の事故で国土の三分の一が被ばく、放射能の七割が降り注いだベラルーシ。ブイソフさんは、ベラルーシ東部のクリチエフ市を拠点とする地方紙「レーニンの呼び掛け」の記者。「放射能で汚染されていない食料を被ばく地へ運ぶ国家予算が組まれているのに、実際はまったく届いていない」「薬が不足して、肺がん患者に歯の薬が投与されていた」など、記事を通じ、事故の悲惨さを訴え続けている。



チェルノブイリ原発事故の悲惨さを訴えるためベラルーシから来日したジャーナリスト

ワレーリ・ブイソフさん



旧ソ連時代の八九年には、放射線測定器を手に高汚染地域を回ったルポを発表。これに対し当局から二日間拘束されたり、家に銃弾が撃ち

込まれるなどの弾圧を受けた。
 今回は初来日。市民団体「チェルノブイリ支援運動・九州」（事務局・北九州市）の招きで、長男のピクトル君（二と）ともに、長崎市や福岡

新しい事務局スタッフの紹介

山口 英文さん（33歳）

ロシア語通訳者として、すでに支援運動で活躍中。ブイソフ親子の来日時の通訳では、各地の女性たちのあつ～い視線を浴びっぱなしたのもしいスタッフの登場です。

県田川市、山口県下関市など六カ所で講演した。

五年前、生後半年の孫・シマちゃんを失った。「直接の死因は食中毒。ですが、医療器具や薬品が不足して十分な治療を受けられなかった。それに、放射能で汚染された食べ物しかないの、抵抗力が落ちていたと思います」。同じように病気で苦しむ子どもたちを見ると原発事故への憤りは増すばかりだ。

小学校の体育館で講演した大分県中津市では、子どもたちの表情の明るさに胸が熱くなった。「ベラルーシでは政情不安や経済の低迷、それにもろろん原発事故が子どもたちに暗い影を落としていて、明るくは振る舞えない」。ピクトル君を見つめながら、そう言った。クリチエフ市生まれ。五十歳。

